「わたしは道であり、真理であり、命である」　　2018 年 05 月 23 日

ヨハネによる福音書 14 章 1 節～6 節　「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。

主イエスは十字架にかかり栄光を受ける時が来たことを知って、弟子たちと共に「最後の晩餐」を持ち、決別の説教をされた。弟子たちは、最後になるとは全く理解していなかった。14 章からは、核心的なメッセージが語られている。主イエスは、「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」と言われた。ペトロは誰よりも主イエスを愛し、誰からも第一の弟子と目されていたが、彼が 3 度も主イエスを否認すると予告されたのである。弟子たちは、そんなことはあり得ないと思い、自分たちも主イエスから離反することは決してないと思った。主イエスへの信従の意を理解されていないと大きな不満を抱き、心は浮足立っていた。主イエスは、心を騒がせるなと言い、神と主イエスを信頼し、落ち着いて聞くように促された。そして、「わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」と言われた。謎めいた言葉で、下記のような意味であろう。主イエスは十字架にかかって殺されるが、復活する。そして、昇天し神の元に帰る。そこで、弟子たちのために場所を用意し、再び戻って来て、主イエスの元へ弟子たちを迎える。わたしとあなたがたは共にいることになる。主イエスは天と地を結び、あなたがたは神と共にあると言われたのである。そして、「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と念を押されたが、知る弟子はいなかったであろう。トマスがすぐさま、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか」と、率直に述べた。トマスは、主イエスが病気のラザロを救うために、危険を承知でユダヤに行くと言った時、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った人である。彼は主イエスと共ならば、死んでもいいと言うほど、主イエスを愛していた。しかし、彼は現実主義者で、主イエスの象徴的な言葉を理解できず、「分かりません」と言っている。分からないことを分かりませんと正直に問うのが求道である。彼の求道に主イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と答えられた。「わたしは〇〇である」は、主イエスが誰であるかを著すヨハネ福音書の定式文言である。ここでは「わたしは道である」に力点がある。主イエスという「道」を通して父なる神の元に行くことができる。主イエスは神に至る唯一の道であるとトマスに答えたのである。